

郷土の礎を築いた武将

# 天童頼直公



早わかり 天童頼直公

平成29年度 成生地区地域づくり委員会 成生いいところ発見班



# 天童の始祖 頼直公



## 成生の地と天童の始祖頼直公

天童市は、山形県のほぼ中央、やや東寄りに位置し、市の西部には、山形盆地の平野が開け、東部は奥羽山脈、市域の西に沿って最上川が、北部を乱川、中央部を倉津川、南部を立谷川が流れている。

成生は、市の北西部に位置し、乱川の扇状地の扇端に広がり、地理的条件では、成生の語源(物が生成する、物が良く育つ)とおりで、まさに生活していく上では、当時から、すぐれた条件のそろった土地だった為、平安の古から荘園として都まで名が聞こえた豊穡な土地であった。

また、「高野坊」この地は、高野坊遺跡、高野坊清水、三本柳清水、箱清水、など湧水池が存在する、イバラトミヨの生息でも有名である。

今では、幻となった、天童市大町から、東根市荷口に至る地域一帯に、相当の戸数の集落があったと、伝承されている幻の「大工寺」は、里見義宗(頼直の義父)が長兄の為に領内に供養寺として、建立したとされている。

11世紀前半、成生庄は藤原摂関家と結びついて成立していたものと思われる。鎌倉時代は、里見氏が地頭として、二階堂氏に代わり受け継いでいったと思われる。

山形城主斯波兼頼の孫で直家の子である頼直が、成生庄の地頭職であった里見家の養子に入った。里見家には、初め斯波兼頼の末弟である義宗が大崎から里見義景の養子として入り、義宗に男子がなかったため1356年頼直を養子に迎え入れた。

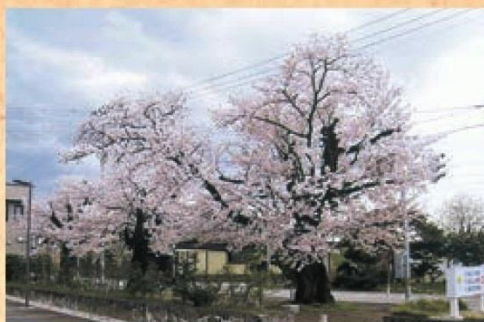
頼直公が、居館した南北朝時代の城館を「成生楯」と称する。楯を中心に村落が形成され、政庁的機能を有するものであり、荘園形成の段階を経て、都市機能を備えていたと考えられる。同時に、城下集落として(上駅、下駅)を整備したと言われ、豊富な水と、豊穡な土地に恵まれ、長い間交通の要衝として機能したものと考えられる。

また、南北朝時代の楯は、軍事施設でもあったため、守護神を四方に祀り、亥の馬場、的場を設け、鍛地場も近傍にあった。

1375年成生楯から、天童の山城に移った頼直公は、山城の防備陣を強化し、山全体が城塞をていし、家臣は半農半士で乱を見ては武装して城に集まった。町並みは整備され、物々交換だった城下町には、沿道沿いに集落が構成されていた。羽州街道が整備された町並みは、原型は頼直公が造られたと思われる。

その後、9代209年、大きな争いもなく、仏教文化が栄え、天童町の発展に尽力された。頼直は晩年、長男の頼勝に家督を譲り、成生楯に戻り、保國寺を建立し念仏三昧の生活を送ったとされている。





市立成生公民館  
小学校前谷地街道  
桜の古木

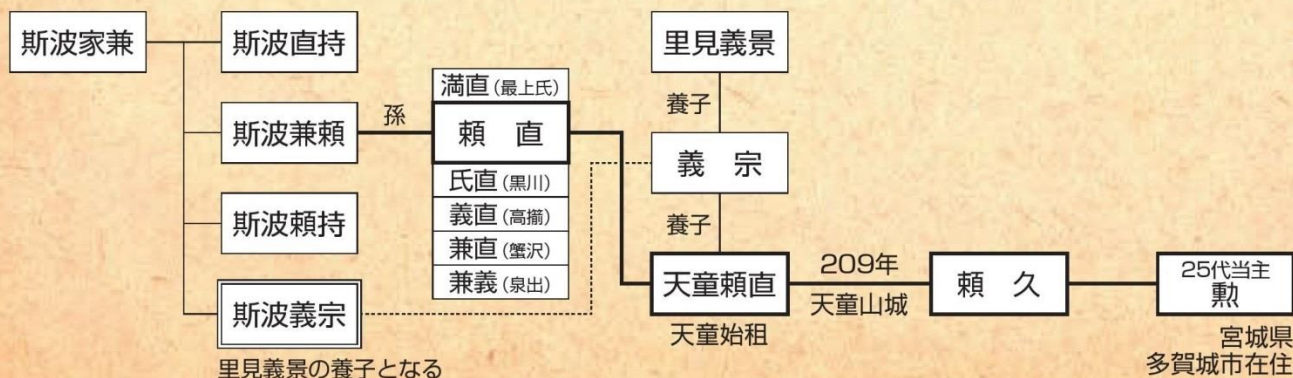


大町から東根市荷口に至る幻の集落  
「大工寺」跡から望む乱川

## 頼直公時代年表

- 1333年 鎌倉幕府滅亡建武の新政始まる
- 1336年 里見蔵人義宗 成生庄に入る
- 1338年 足利尊氏 北朝より征夷大將軍任じられ室町幕府を開く
- 1356年 8月6日 斯波兼頼 最上郡山形に入部する
- 8月22日 頼直 成生に入る (斯波兼頼の孫頼直が里見義宗の養子になる)
- 1357年 兼頼 現在の山形城に築城
- 1375年 頼直 成生の楯から天童山城に移城 天童氏を称する (天童頼直)
- 1392年 南北朝統一 室町幕府成立
- 1410年 頼直 没す
- 1568年 天童頼久 誕生する
- 1584年 天童頼久 最上義光に攻められ落城
- 1588年 天童頼久 伊達家に仕える

## 斯波氏 里見氏 天童氏系図





# 成生楯の想定図



大工寺 (大興寺)



月山

西に最上川



稲荷神社

薬師権現  
ケヤキ群は市指定天然記念物



チョウゲンボウ



薬師神社



保国寺跡 (準抵観音堂)

頼直公の菩提寺保国寺屋敷楯の南西部十二天に建立  
頼直公の晩年は念仏三昧

城郭から成女(北西)の方角子の誕生と夜泣きを治す神様境内のケヤキの大木は市指定天然記念物(樹高35m 樹齢700年)  
頼直公の氏神で武士の信仰は盛んだった



イバラトミヨ

二階堂遺跡



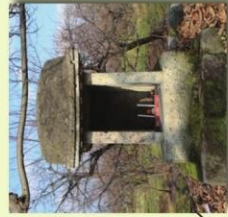
城郭の亥の方角戦の守護神諏訪権現を記る

諏訪神社

サクランボ



城郭の丑寅方角(鬼門)湧水が点在、縄文中期土器4000年前の住居跡発見



熊野神社

「楯の内」で城郭の東端の高台に祀る成生の水を象徴する神社として造営



龍頭神社

至大明神

金谷

JA天童

至原崎・若松観音

成生小学校

市立成生公民館

至高木・小関・天童



白山神社

城郭の辰巳(南東)方角白山権現(神仏習合)を祀る荘園の屋敷神  
楯等の大木が天高くそびえる林であった

三条道



保国寺跡 (準抵観音堂)

頼直公の菩提寺保国寺屋敷楯の南西部十二天に建立  
頼直公の晩年は念仏三昧

# 天童頼直公

## 成生の地名について

成生の語源は、成（ナリ）はナル、物がナルの意。生（ウ）もウムの意の他に、ナル、ナリの意があり、成生で「物が生成する、物が良く育つという意の語であろう」（安彦好重著「山形県の地名」より）。また、成は緩斜地、平地を表す均（ナル）と同意語という説もある。

「生」を生まれると解した場合、鮭の遡上が考えられる。成生の地で、乱川と押切川に育まれた扇状地の伏流水である湧水によって潤され、米、雑穀、豆類の生産の他、貴重なタンパク源である鮭を捕獲できた。

## 天童の自然、特性

天童市は、山形県のほぼ中央やや東寄りに位置し、西に山形盆地の平野が開け、東は奥羽山脈に含まれる山岳地帯となっている。

市域の西に沿い最上川が、北を乱川、南を立谷川、中央を倉津川が流れている。

気候は内陸性の特徴があり、夏、冬の気温の差は大きく、降雪量は県内で比較的少ない。

年間平均気温は11.5度で、年間降水量も全国平均より少ない。地震、風害なども極めて少ない。



## 成生庄

荘園の領域は、南は立谷川、西は最上川、北は乱川まで（現在の天童市域と山寺を含む地域）。この範囲は扇状地で、湧水が豊富で自然環境にも恵まれているため、農業に適し縄文遺跡も多い。

### 成生庄支配者の変遷

11世紀前半、成生庄は摂関家藤原氏と結びついて成立していたものと思われる。当初、摂関家藤原氏から天皇家御領となり、鎌倉時代になると、地頭職として二階堂氏・中条氏・里見氏が所領したと考えられる（諸説あり）。

### 成生庄に関する資料

文献上の初見は、1176年「八条院領目録」に「出羽国大山 成生」とある。

1201年「僧尋暁覚台房俱舎七十五法名目書写」に「成生御荘小島村」。

1263年 若松寺に寄進された懸仏の裏面に、藤原真綱等の名前が線刻。

1306年「昭慶門院御領目録」に「出羽の国大山庄 成生荘」。

1311年 大清水高野坊遺跡から出土した墨書礫に「出羽国最上郡成生御庄政所藤原」。



## 荘園の生活を支えた宗教文化

寺院の成立や神々の信仰の拡大は、大和朝廷の成立や鎮護平安と切り離せない。辺境の地であった東北、なかでも蝦夷を感化したり同化したりするには大きな役割を果たした。やがて、住民生活が安定する中で、仏教や神々の信仰は深まり拡大していった。

## 成生庄周辺地域の信仰の拡大

朝廷の保護を受けた定額寺院（古代の朝廷で一定数を限って保護した官寺）が、出羽国には6カ所、出羽の鎮護のため造られている。その後、天台宗、真言宗が東北に浸透していく。立石寺・若松寺・東漸寺<sup>とうぜんじ</sup>は、天台系の寺院である。天台系の千手堂吉祥院、天台・真言両宗の慈恩寺<sup>じおんじ</sup>も同時代に建てられた。

10世紀にまとめられた「延喜式神名帳」<sup>えんぎしきしんめいちょう</sup>によると、出羽国の神々として大物忌神社・月山神社<sup>おおもものいみじんじゃ</sup>があげられ、国家が神を保護し、叙位を授けている。

## 天童市内（成生庄内）に残る神社、寺院

### 神社

- 春日神社（道満）藤原氏神
- 熊野神社（久野本、荒谷）熊野神
- 八幡神社（清池、蔵増、上萩野戸）八幡神
- 日枝神社<sup>ひえ</sup>（寺津、長岡）大山咋神<sup>おおやまくいのかみ</sup>
- 稻荷神社（原町）
- 諏訪神社（成生）信州からの移住者の神

### 寺院

- 山寺立石寺
- 千手院吉祥院
- 佛向寺
- 若松寺 708年 行基が開山 奈良の法相宗から天台宗に改宗

しょうかんのんぼさつざどうかけほとけ  
聖観音菩薩坐像懸仏



## 一向宗の伝播と成生庄

高野坊遺跡から発掘された墨書礫ぼくしょれきから、14世紀に念仏聖ねんぶつひじりの活動が行われていたこと、念仏聖一向義空ねんぶつひじりいっこうぎくうの二十七回忌の法要が行われ、施主は藤原入道と後藤和泉である事が明らかになった。また、「出羽成生」「最上郡成生庄養観堂」などの墨書礫ぼくしょれきも出土。成生庄の存在が確認された。

一向宗は一向俊聖いっこうしゆんしやうが一向派として関西中心に遊行。

1278年 成生庄に入り、一向専修念仏いっこうせんしゅうねんぶつを広げた。



## 天童氏の系譜

戦国武将天童氏の誕生は、室町時代の南北朝中期ごろと云われている。成生庄の豪族里見氏みやうせきの名跡を受けついで山形城主斯波兼頼しばかねよりの孫頼直を初代としている。

1375年 頼直が舞鶴山に城を築く。

209年後 1584年 10代天童城主頼久、村山地域の覇権をかけ山形城主最上義光と一戦を交える。

敗れた頼久は陸奥の国（宮城県）に落ち行く。その後は天童頼澄てんどうよりずみと名乗り、伊達氏に庇護されながら家臣として幕末まで存続し、25代にわたり連綿と命脈を保っている。



## 成生庄と里見氏

里見氏は、清和源氏・新田義貞の子義俊よしとし さとみごうが里見郷に住み、里見を名乗った事を祖とし、その子孫の為宗ためむね、同じく義景よしかげが、二階堂氏に代わって成生庄に下向したのではないかという見方をされている。また、後世活躍している陸前や羽前には、里見という武将が多く存在していたという。しかし、成生庄にいつどのように下向したか、二階堂氏の所領を受け継いだことを示す史料は見つかっていない。

## 斯波兼頼の入部と天童氏

1333年 鎌倉幕府が滅亡し建武の新政が始まった。しかし1335年 北条時行が鎌倉を落としたことから南朝、北朝の勢力争いが激化。各地で騒乱が続くことになる。

南朝方の北畠の系譜につながるのが、舞鶴山に城を築いたと言われる北畠天童丸である。

1351年 北朝を支えて室町幕府の将軍となった足利氏は、武家政権の基礎が固まらないうちに内部分裂を起こし、足利尊氏と直義の兄弟が相争うこととなった。直義の急死により内紛はいったん収まったが、幕府は奥州の支配を強化するため、斯波家兼を奥州管領に任命した。この斯波氏の子孫が天童氏の系譜に関わってくるのである。家兼は奥州探題の要職にありながら、北朝勢力の拡大を狙っていた。

1356年 斯波家兼の二男兼頼が、羽州探題として山形に入部してくる。

村山地方は南朝方の勢力が強く、それを駆逐するため、山形の山家氏の懐柔策として足利氏の息女を山家信彦に嫁がせ、その子家信を兼頼の子直家の養子にしたりして、地固めをしたと言われている。さらに兼頼は、寒河江の領主大江氏や東根の小田島氏など、南朝方の豪族を牽制したり、同盟を結んだりしながら、安定した領地の獲得を目指した。それが容易にできたのは鎌倉幕府が滅亡するにおよんで、出羽に広がる大山庄、大曾根庄、成生庄、山辺庄などが、北条氏から足利氏の領地になったことと深く関係しているようである。

1357年 兼頼は、現在の山形城の位置に築城を始めた。この時期になると、奥州の諸将も領国制を目指し、独立して地歩を固める傾向を示し始める。

1392年 将軍足利義満は陸奥、出羽両国を鎌倉府の管轄にし、関東公方足利氏満の支配下におく。

斯波兼頼の子直家になると、支配地を広げるため、最上氏は庶子たちを各地に分封した。

直家は、頼直、氏直、義直、兼直、兼義を、天童、黒川（宮城県大和町）、高楯、蟹沢（東根市蟹沢）、泉出（山形市成沢）に封じた。三代の満直も、満基、満頼、満国の庶子の中野（山形市仲野）、大窪（村山市大久保）、楯岡に配置した。

なお、天童の舞鶴山の山城に入った頼直を、天童氏の初代と見るのが通説となっている。山形城主斯波兼頼の孫で二代直家の子である頼直が、成生庄の地頭職であった里見家の養子となった。

里見家には、はじめ斯波兼頼の末弟である義宗が大崎から里見義景の養子として入り、義宗に男子がなかったため、頼直を養子に迎え入れた。山形と天童は同格に扱われ、奥州において天童殿は一目置かれていた。



## 天童氏の分封

1356年 斯波兼頼の孫頼直が、義宗の養子に入った。二階堂氏以来成生の集落は拡大し、楯を中心として村落が形成されていたと思われる。

1375年 頼直が、成生の地から舞鶴山の城主として天童の地に移る。以来、天童氏を名乗ったと云われている。

頼直は晩年、頼勝に跡を譲り、成生楯の南西部十二天に成生山保國寺を建て、念仏三昧の余生を送ったと云われている。

天童頼直には5人の子がおおり、三男の満長を上山へ（里見兵部大夫を名乗る）、四男の頼高を東根へ（里見氏を名乗る）、五男の頼種を鷹巣（大石田）へそれぞれ分封した。嫡子、長男の頼勝は天童から蟹沢に移り里見修理大夫を名乗る。天童氏系図によれば、二男の頼泰が二代とされる。長男の頼勝は隠居し、家督を頼泰に譲ったのであろうか。

他の最上の庶族が子たちを分封した事実がないのに、天童氏だけがそれぞれ一家をなしたということは、天童頼直が権勢を誇っていたことにもよるが、天童氏が里見氏の所領を受け継いだことによるものであり、地頭職であった里見氏の勢力が大きく根を張っていたからに他ならない。

頼直が天童に移り住んだのは、南朝の勢力が衰退し、北畠天童丸が舞鶴山の城から去ってからのことである。

## 成生楯跡の考察

頼直が居館した南北朝時代の城館を「成生楯」と称することとする。明治9年の「地誌取調書」によれば、成生楯の規模は、本丸の東西が約150メートル、南北が180メートルで、二の丸も東西が180メートル程あったという。

昭和21年に丸山茂氏が作成した「成生楯跡実測並び想定図」には、成生楯跡・本丸・二の丸が表記されている。また同氏著「最上四十八楯の研究」には、守護神として丑寅方に熊野神社、辰巳方に白山神社、羊申方に薬師権現、戌亥方に諏訪神社をまつり、楯内には、化粧井・亥の馬場・的場等の地名が残り、頼直の菩提所保國寺も楯の西南隅にあるとされている。

### 成生楯





## 城館そして館（楯）と城の概念

城とは、土を掘って「堀」とし、掘り上げた土を盛って土塁としたことによるものである。

1356年 頼直が成生に入った時期は南北朝時代。この頃の城の姿もこのようなものであったろう。

「館・楯（たち・たて）」：本来政庁的機能を有するもので、後に在地有力者や豪族武士団当主の居館に用いられるもの。「方形居館」という単郭（一重の堀・土塁・堀に囲まれた屋敷）の構えのもの。

「城（じょう）」：城郭と呼ばれるもの。紛争時に臨時に構築される非日常的な軍事施設として実利的な機能、また、聖域・宗教空間として位置付けされる。

南北朝時代、この両者をあわせもつ城館が存在。より軍事性を増すことで、単郭から複郭（城館）に構えが変化していった。館と楯の使われ方に差異はないが、当地方では楯と表記しているのが多い。

## 成生楯の地理的立地環境

成生の楯の立地や構造の特徴を見てみると、扇状地末端の湧水地帯ゆうすいにあり、生産基盤となる水田とそれに近接して中世の村があり、生産としての水田と生活の場所と村が分かれず、村落と一体となって城館があったと考えられる。

成生の地は、地名のごとく豊饒な土地を意味するものであり、乱川と押切川という名の通り暴れ川の川沿いの地域である。しかしながら、自然災害、地震、台風、火山等とは縁遠く、住みやすい土地であったといえるのではないだろうか。

上流からもたらす肥沃な土壌は多くの実りを与えた。平安の古から荘園として都にまでその名が聞こえたのは、植物の生育、人や家畜の水利確保が十分な土地だったからであろう。独鈷水どっこすいと呼ばれる湧水源を各所にみることが出来たように、水に餓えることはなかった。

乱川、押切川は、冬期間も温暖な湧水を合流しているため、鮭の産卵場としても好適であり、漁場として知られてきた。

また、水運の利便性もあった。成生庄も最上川を中心として発達したとも考えられる。最上の流れは村と村を結びつけ、その生産物を遠い他国に運んだに違いない。これらの村と川を結ぶ結節点には、河岸集落が発達したと考えられる。





## 地政学から見た成生楯

南北朝時代の動乱期において、楯は当然軍事施設でもあった。天童山城には北畠天童丸がおり、これと最上川対岸溝延城<sup>みぞのべじょう</sup>の大江氏との連絡を断ち、北朝方の谷地の中条氏と連絡を保つには、成生は絶好の地であった。

これらの理由で、大崎斯波氏の意向で、頼直が里見氏の養子として成生楯に入部したと考えられる。これらの戦略的な要因のほかに、成生はすでに荘園形成の段階を経て、都市機能を備えていたと考えられる。それを物語るものとして、時宗の寺院（佛向寺等）や僧尼<sup>そうに</sup>があるところは都市的な場、あるいは都市そのものであったとの説がある。

「成生庄に藤原兼家の荘園があったと思われるものに、<sup>げんこんなお</sup>現今猶成生の地字に小納言、御台田など地名あり、清池清水という泉もある。成生庄の庄家と伝承されている藤原兼家は、公卿として少納言から累進し、中納言を極官とし、晩年京都の東三条に邸宅を構えたので、三條殿とよばれた。」（「天童の生いたち」）これは、成生の条理制を示しているといえないか。

成生楯の南側の現道路沿いの字地名に「字上駅、字下駅」があり、宿場町を伺わせる。昭和42年には大量の宋銭も出土し、当時の商業・流通がいかに発達していたかが伺える。

## 城郭の範囲（外郭占地）

中世は武力と宗教の時代であった。したがって宗教的権威を高めるためにも、武士の本拠においては、城郭周囲に神社仏閣を配置し、これに守護を託し拠り所とした。

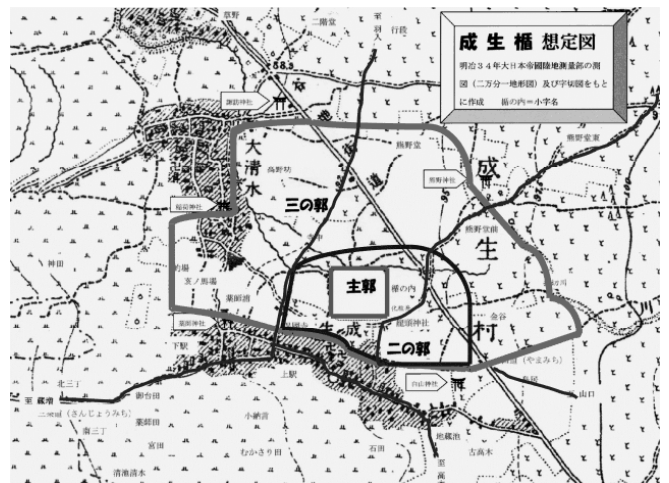
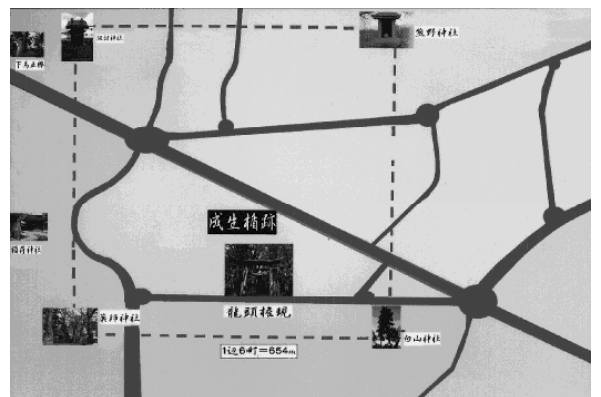
北東には（鬼門）には、広大な熊野の文字を冠した字名（成生熊野堂、大清水熊野堂、熊野堂東、熊野堂前）がある。そこには本地が阿弥陀仏である熊野神社が鎮座している。

西には諏訪神社、南に白山神社、諏訪神社の南方薬師神社がある。

薬師神社と白山神社諏訪神社と薬師神社の間戊亥には稻荷神社がある。

成生の楯もこれらの寺社を守護とし、外郭の外側に配置したのではないかと考えられる。

楯の領域としては、楯の内の西側成生字薬師浦と大清水亥の馬場と的場、北は大清水字高野坊・大清水字熊野堂、東は成生字熊野堂。成生字金谷は押切川の流れを境として、中に成生字寺中を含む南北最長約650メートル、東西最長約1,250メートルが楯の外郭と推定される。三の郭の内側の面積は、およそ60ヘクタール（18万坪）と推定され、実に東京ドーム13個分である。





## 成生楯の構造

### 主郭

東側の堀跡並びに西側の段を形成しているまでの一角が考えられる。大清水水源地から押切川まで続く<sup>せき</sup>堰が当時の堀跡と推定される。東西の幅は約145メートルで、堀底における標高はほぼ平準である。そもそも成生楯は押切川から取水した水堀であった。

龍頭神社境内の土塁の高さは実測2.3メートル。また、堀幅は11メートル、深さは2.3メートルである。

中世前期の城郭は比較的簡素であった。小さな馬にまたがった当時の騎馬武者は、比較的幅の狭い堀や逆茂木でも防ぐことができたため、騎馬武者が木戸口に殺到し攻防の焦点となった。ところが南北朝期になると、徒歩立ちの武者が城郭に攻め寄り、その集団は堀の底から城壁の際に攻め登り、逆茂木、塀などを破ろうとする。

主郭の入り口（虎口）は、大手と称する正面は南側に位置し、<sup>からめて</sup>搦手は北の押切川に抜ける背面にあったと思われる。主郭の面積は約1.9ヘクタール（5,700坪）。

### 二の郭

この領域は、字名「楯の内」から推して字全体が考えられるが、一直線に伸びる谷地街道は近世に築造されたので、地形からみてその東側にも広がっていたと推測される。

現在、北側は押切川に接しているが、当時の流路は上流から東側を蛇行していた。その他は、現在ほとんど道路になっているのが、郭の境界であり、廃城となった後に堀を埋め立てて道路になった。二の郭の面積は、約15ヘクタール（4.5万坪、東京ドーム3個分）。

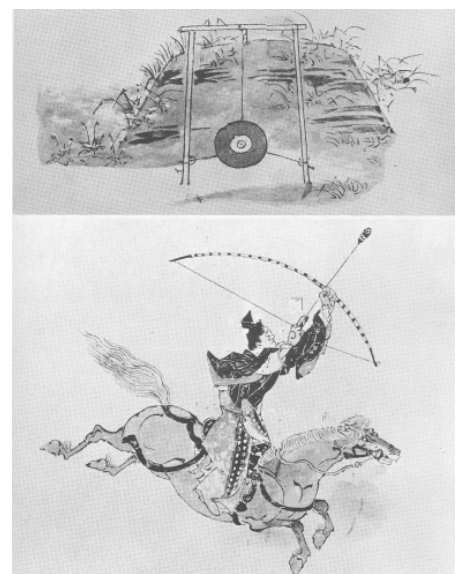
### 三の郭

この領域は、東に成生字金谷、西に大清水字亥の馬場・同字的場・成生字薬師浦、大清水字高野坊、北は押切川を隔てた成生字寺中、大清水字熊野堂の一部、成生字熊野堂前の一部の区域であり、広大な城館であったことは確かであろう。

## 城郭の関連施設（武芸の場）

中世時代において、武士とは何よりも「武」という芸（技術）によって他と自らを区別した社会的存在のことだった。流鏑馬や歩射等の弓矢神事は武士と在地領主の両面で重要だった。

成生城郭では 楯の内（二の郭）亥の方角（北北西）稲荷神社に隣接して字名亥の馬場（馬の調練場）、その西に的場（弓の練習場）が位置している。



## 鍛冶場

金具、刀剣、槍、武具類製作のための鍛冶職人の工房と住居が楯の近傍、成生楯の東面に隣接する金谷という字地にあったと考えられる。

## 頼直公ゆかりの社寺

天童氏の始祖、頼直公ゆかりの社寺を、今でも「何々様」と呼んで敬っている。

### 城郭に祀られた神社

- ・おりんつあま（龍頭神社）：お竜神様が転訛

成生楯の内で城郭の東端の高台に祀られている神社。

「成生の歴史雑考」に龍頭権現の由来が記されている。

この由来の出典は、龍頭神社の別当家であった黒田家に伝わる。（「龍頭権現社地之事」）

この文書が入っていた筒は室町時代の作で、市指定の文化財になっている。

筒と文書は、頼直公が成生から天童に移城の際、黒田家に賜った物。龍の信仰が多く雨乞い、農耕儀礼に重要だったのであろう。成生の水を象徴する神社として造営か。頼直公も人知を超えた神獣を介して威厳を示したのだろうか。



### 楯の守護神

- ・はくさんさま（白山神社）

城郭の辰巳（南東）に位置する守護神で白山権現を祀っている。庄園の屋敷神で、領主の氏神では垂迹すいじやくの神を祀ったと言われている。

白山権現は神仏習合の神で本地仏は十一面観音菩薩であるが、水神信仰の神この辺りは広大な境内地もみで樅等の大木がそびえる林であった。



- ・おやぐしさま（薬師神社）

調城郭の羊申（南西）の方角に位置する守護神で薬師権現を祀っている。薬師如来は坐像で、両手を組み、薬瓶を持っている

神社境内のケヤキは市指定の天然記念物。

12本の巨木は壮観である。長元坊（チョウゲンボウ）の生息地として有名である。





### ・いなりさま（稲荷神社）

城館から戌亥（北西）の方角、大清水共和に建立。頼直の子頼勝誕生と乳母にまつわる伝説から、古くから夜泣きを治す神様として信仰を集めた。境内の市指定の大ケヤキは35メートルで市内最高の樹高。樹齢も700年を超える。

また、境内の南側一帯は「亥の馬場」「的場」など武芸にちなんだ地名が残り、神社へ<sup>けんこく</sup>献穀した水田<sup>かみでん</sup>「神田」もある。

稲荷は「铸成」とも書き、铸物師や鍛冶師が信仰した神。武器を持って戦う武士のいなり信仰は盛んだった。

本殿に安置されているご神体は「夢の観音」と云われ、頼直公が祀ったものとされている。頼直公の氏神として祀ったのではないか。



### ・おすわさま（諏訪神社）

成生城館の亥の方角に建てられた守護神の一社。

大清水字高野坊の地に鎮座し、武事の守護神諏訪権現を祀る。

以前は周囲に堀と土手をめぐらし、ケヤキや松の大樹に覆われた<sup>さんはんちうね</sup>三反地畝（約3,400平方メートル）余の境内であった。今ではお堂のみがひっそりと佇んでいる。付近には、成生庄の地頭屋敷と言われる二階堂遺跡、高野坊遺跡がある。



### ・おぐまんさま（熊野神社）

成生城館の丑寅（北東）の方角、鬼門に建てられた神社で、石の万年堂に熊野権現が祀られている。お堂は失われているものの、石祠は現存している。以前は四反歩（約4,000平方メートル）の境内にケヤキや杉の大木が茂り、昼なお暗い林であった。

熊野信仰は、平安時代以降、観音信仰や阿弥陀信仰と結びついて盛んになった。平安時代前後に普及した陰陽道の影響や、北東の「鬼門」という日本古来の方角の神聖視信仰のため特別視されたのか。

また、付近には湧水地が点在し、縄文中期の土器や4000年前の住居跡も散見される。さらに、近隣地から<sup>きんあわ</sup>金泡等が出土しており、城館に関連した施設があったものと考えられる。



## 守護神

成生城館が、いつ誰によって築かれたかは明らかでない。一説には、平安時代に藤原氏の一族を成生庄に派遣して荘司とし、蝦夷の築いた荘家を増築したといわれている。守護神は1185年に祀られたという記述があるものの確証はないが、境内のケヤキが樹齢800年前後と推定されるため、それと符合している。それらの社は同時に創祀されたのだろうか。

四方に建立された守護神の位置を図上で直線距離を測ってみると、約6町（654メートル）の方形に収まっている。一定の規則性があり、意図的に作られたことは確かである。

## 城郭の正面に建立された寺

### しょうげんつあま（龍頭山性源寺）

中世時代、成生の集落は城下町として栄え、性源寺はその中心地「上駅」の地で城の正面に建てられた。山号の龍頭山は頼直の故事に倣ったもので、南北朝時代に創建された。

### 龍光山緑陰寺 1594年現在地

1091年に成生庄の荘官が藤原家の氏神である春日大明神を遷宮した際、別当寺院として創建。乱川地区に大明神原といわれるところがあり、その近くにお寺林とよばれていた当寺の寺有地もあり、往時の寺勢を想起させる。

大明神原にあった時代は、度重なる洪水や為政者の交代劇で民衆は疲弊し、住職を先頭に本願念仏の教えに救済を求めた。

## まぼろしの寺

### ほうこくじ 保國寺

楯内の西南隅にあったとされる。

成生字楯の内378番に立派なお堂があり、正面の扁額に「準抵観音」と刻まれている。地元の人々は「ずんてんさま」とよんでいる。

丸山茂氏が作成した図面には、準抵観音所在地に卍のマークとともに「保國寺屋敷跡」

と毛筆で記され、卍の印のところに鉛筆で「十二天」と添え書きされている。この辺りに存在していた塔頭の仏像を、何時の時代かここに合祀したのではないかと考えられる。

十二天という地名は「天童の生い立ち」にも見られる。「頼直は晩年、職を頼勝に譲って、成生館の南西部十二天（伏所）に成生山保國寺を建立。晩年は念仏三昧の生活に入った。」現在、十二天という小字名は現在見当たらず通称だったと考えられるが、図面と地番を照合した結果、字楯の内と隣接する字薬師東の一部であることが判明した。この地は保國寺跡と推定される場所から至近距離にあり、当時はこの辺り一帯が保國寺の境内だったのだろうか。





また、この近くには薬師権現が祀られ、地名に薬師浦、薬師東が存在することから、この辺りは広い範囲で薬師如来に関する社寺があったのではないかと推測される。

## だいこうじ 大興寺

天童市大町から東根市荷口に至る地域一帯に、かつて、相当の戸数があったと伝承されている幻の集落「大工寺」があった。集落には、東昌寺とうしょうじ、今町寺こんちょうじ、大興寺だいこうじの三カ寺があり、一番の格式の高い大興寺が天童に移転し、いつの世か廃寺はいじになった。今町寺には、船着観音または荷受け観音と呼ばれる舟運の安全を祈った観音様が祀られている。この地は昔、最上川の船着き場として繁栄していたことが伺える。

## 頼直公と一向上人

### 一向上人に帰依した頼直公

源頼直が鎌倉で徳の高い一向上人に出会って感銘し、上人に帰依した頼直の懇願によって一向上人が出羽国に入り、最初は高野（山形市）の道場にて、布教活動し、静雲寺を開基したという。その後、頼直の子頼泰が父の命により城外成生庄しちどうがらんに七堂伽藍と十八坊をもって宝樹山称名院佛向寺を建立したとされている。

ただし、頼直が没したのが1410年、で上人が没したのが1287年で、直接会うのは無理がある。



佛向寺は1942年まで、一向上人を開祖とする時宗一向派の寺院であったが、現在は浄土宗で山号は宝樹山である。しかし、江戸時代の後期に、近江の蓮華寺と天童の佛向寺が本末を争い、幕府の裁定を受けるとい歴史がある。一向が東国には全く来ていないとの資料もあるが、一向の足跡から東北遊行の部分削除され著しく改ざんされた可能性が考えられる。当地方における急激な念仏の興隆や当地方に残る一行伝承との関連などから、やはり一向は当地に下向しているとみられる。

時宗の開祖一遍上人と同時代を生きた一向上人は、諸国を遊行し、踊躍ゆやく念仏を広めるため各地に道場を作り、1287年、番場蓮華寺で亡くなったと伝えられている。一向上人が二口戸峠を越えて出羽国に入ったのが1274年、清池に石仏寺を開き、成生地内に念仏道場を開いて布教したのが1278年である。成生の地で一向上人は二階堂氏の保護を受けながら、領内に念仏を広げたのだろう。佛向寺が成生の地から現在地に移転されたのは、1398年と記され、頼直が天童に移城してから、23年後のことである。

## 佛向寺はどこにあったのか

天童市教育委員会が大清水二階堂に設置した案内板には次のように記載されている。

「一向上人は、1278年に成生庄本荘二階堂佛向寺門前下馬止より南方150メートルの高野坊清水付近に創設し、1283年、空也上人の教えに基づいて、京都六波羅蜜で宝樹山佛向寺と改めた。

1295年、成生庄荘官職藤原兼家、

下馬止より北方300メートルの地に佛向寺を再建した。佛向寺門前下馬止の左側に守光院、右側に熊野権現、さらに右方寺華中に保國寺を創建。佛向寺は、天童城主三代里見頼基が、1419年、天童市小路に移された。」



## 高野坊遺跡が語るもの

この地は、乱川と押切川にはさまれた扇状地の扇端部にあたり、付近には、今でも高野坊清水や三本柳清水、箱清水など湧水池が存在している。

高野坊清水には、氷河期の遺存種といわれ、現在、絶滅危惧種に指定されている魚イバラトミヨが棲息している。

高野坊遺跡の土杭から礫石経れきせききょうが出土されている。1311年、鎌倉時代末期のものである。一向上人義空菩薩の27回忌にあたり、出羽国最上郡成生庄で、弟子の行連ぎょうれんが大願主となって経を書写し埋納したと考えられる。

村山地方には、三つの高野という地名があるという。

一つは山形市大字高沢で、昔、高野村と称されている。1274年、一向上人が出羽国に入って初めて開山したと伝えられる寺院清雲寺が建立されており、開山杉も存在するという。

二つは天童市大字高野辺で、江戸時代は蔵増の枝村である高野村であった。時宗一向派で佛向寺の末寺である仏性寺が建立されている。

三つは上山に高野という集落があり、その下方の土矢倉に西光寺（石崎町）が開山されたと伝えられる場所がある。一向上人の法嗣の其阿が開山したと伝えられ、佛向寺の役寺だった。

そして、天童市大清水の字名「高野坊」の地であるが、この字の範囲はきわめて広く、約15.5ヘクタールにも及ぶ地域である。

地頭屋敷と言われた政所の役目を終えた二階堂屋敷に、佛向寺と称して再建したという見方が妥当か。その後佛向寺は、門前の地藏堂、下馬櫓、供養塚、という一連の寺域が形成されたと思われる。



写真提供 武田 隆吉氏



## 頼直公の事績と人物像

### 200年余、郷土を治世

大正13年、舞鶴山の山頂にあり長い間荒廃していた天童家ゆかりの天童神社が、町民の手によって再建された。それを記念し祭典が行われた際、「天童神社祭典旗行列の歌」が、天童小学校児童全員によって合唱されたという。また、天童神社に頼久公の采配を寄進するために訪れた天童末二氏ら一行が、町民から大歓迎を受けたという。

このことから、少なくとも百年前に、天童町は官民挙げて天童氏始祖に対して尊敬の念を持っていた。

1375年 頼直公は成生の楯から天童の山城に移り、その後、9代209年間に渡って、天童町の発展に尽力された。その間の事績を残した記録や伝承は残っていないが、現在の天童町の礎を築いたことは疑いのないことである。この間、この地は平穏な日々が続き、大きな争いもなく、仏教文化が栄えていたことだろう。

### 城下集落の建設に着手

頼直が成生に赴いてから、成生庄時代に築かれた楯を構築し、同時に城下集落として成生地内の「上駅」「下駅」を整備したと考えられる。

地名に駅が付いているのは古代の水駅や馬家などに見られるが、明治時代になってから整備された字切図にはあまり見られない。それだけに、成生の集落は豊富な水源と豊穡な土地に恵まれ、長い間交通の要衝ようしゅうとしての機能を備えていたと考えられる。

天童に移城した頼直は、山城の防備陣を強化し、道路や城下集落の整備にとりかかった。そして、農耕をすすめ、池溝を掘り灌漑に便し、仁政をもって民を治めた。舞鶴山は山全体が城塞を呈しているため、ここに築城するに当たり、当時の羽州街道である横道に面し南方に大手門を設けている。通称七曲りと称する通路は、容易に兵馬を進めることも出来ない急坂で、天守閣は愛宕神社山頂に構え、そこを本丸とした。北東、北西、南東、南西に走る支衛脉えすじの要所に天童八楯てんどうやっだてを設けた。

舞鶴山には今でも四方に登山口があるが、そこには佛向寺をはじめ必ず仏堂を配置していた。これは天童公の信仰心の篤さを物語っている。

当時の経済生活は、主に物々交換だったため、城下町は横街道沿いに、六日町、七日町、十日町の、いわゆる市日集落いちびしゅうらくを形成していた。北目の南西部には一日町、五日町なども賑わい、現在の地名に受け継がれている。その後、羽州街道が整備され町並みは一変したが、原型は頼直の時代に造られたものと思われる。

舞鶴山の西山麓にも北方の成生に向かう脇街道があり、そこに家臣を住ませ、侍小路さむらいこうじと称し、現在の小路の前身を形成した。当時の家臣は、半農半士で普段は農耕にいそしみ、乱を見ては武装して城に集まるといった形態だった。頼直公も山上の城はいざという時の最後の砦とし、集落の中心の北目に邸宅を構えた。頼直公が天童山城に移って以来、彼は周辺の武

将を武力で制圧するタイプでなく、部下の信頼が厚く、豪放な一面を持ちつつも、緻密さと宗教的意識の強い武将ではなかったかのだろうか。太平の世に殿として必要な、武勇よりも文徳が重んじられたのであろう。

## 仏道に帰依した頼直公

頼直は天童移城後、14世紀末頃に家督を長男の頼勝に譲り、かつて居住した成生に移り保國寺を建立し、隠居して念仏三昧の生活を送った。

東北地方には、鎌倉新仏教の中で念仏往生を説く時衆（一向宗）が最も早く広がり、一向上人と二階堂氏、佛向寺と頼直の関係が如実に物語っている。

南北朝時代は騒乱に明け暮れ疲弊した民衆の心をいやすため、頼直は、心の拠り所として、神社仏閣の創建や修復に尽力したのであろう。

## 頼直公の人物像

龍頭神社の縁起には、<sup>ごうほうらいらく</sup>豪放磊落な頼直公の一面が記されている。

頼直公を始祖とする天童氏は、そもそも最上諸族が独立性の強い領主制の中でも、別格の自主性を示し、ほとんど山形本宗と競合するような大名形成の過程にあった。

このことは、天童氏の武力や経済力だけでなく、政治的地位からも伺える。初代頼直公は<sup>うきょうたゆう</sup>右京大夫、その子頼勝は<sup>よんいしょうしょう</sup>四位少将、頼泰公も四位少々、<sup>しゅうりたゆう</sup>修理大夫という官位を得ていたことから、山形最上家とは対等の地位にあったということは疑いのないことである。

頼直公の逝去後、山形本宗最上家と特に縁が深い中野城内に縁者が「成生山時宗向国寺」を建立してまで供養したということは、彼の徳の表れであるといえよう。

頼直公は、最期まで時宗念仏行者としてこの世を全うしたのであろう。



## 成生庄と頼直公関連年表

- 647年 出羽に前線基地として柵が築かれるようになる。<sup>ぬたりさく</sup> 淳足柵が築かれる。  
※柵：木の柱を建て並べて敵を防ぐために作った砦。
- 648年 <sup>いわふねさく</sup> 磐船柵が築かれる。
- 654年 東北地方の南半分が大和政権に組み込まれ、<sup>むつのくに</sup> 陸奥国が成立。
- 658年 <sup>つきささらさく</sup> 都岐沙羅柵が築かれる。  
<sup>あべひらふ</sup> 阿部比羅夫により、大和政権の制圧が日本海ルートから始まる。
- 689年 <sup>うきたむさく</sup> 優嗜雲柵が築かれる。
- 708年 行儀菩薩により若松寺が開創される。  
<sup>でわのさく</sup> 出羽柵が築かれる。  
<sup>むつかみかみこうずけのおたり</sup> 陸奥守上野毛小足が陸奥の国府多賀城に着任。以降22代791年まで続く。
- 712年 出羽国が成立。成生周辺は最上郡となる。
- 715年 <sup>しもつけのくに さがみ かずさ ひたち こうずけ むさし</sup> 下野国、相模、上総、常陸、上野、武蔵6ヶ国の富民千戸が陸奥国へ移住する。
- 716年 陸奥国最上、置賜二郡、<sup>しなの</sup> 信濃、上野、越前越後の百姓百戸が出羽国へ移住する。
- 717年 <sup>おおのあずまんど</sup> 大野東人により、大和政権の太平洋ルート制圧。797年まで続けられる。
- 719年 出羽国に国司がおかれる。
- 794年 桓武天皇による平安京への遷都。
- 801年 <sup>さかのうえのたむらまる</sup> 坂上田村麻呂、蝦夷を平定する。
- 802年 下野国外、相模、上総、武蔵、常陸、上野、出羽、越後等の国民9千人が陸奥国伊治城に遷地される。
- 810年 <sup>さが</sup> 嵯峨天皇により、初めて蔵人所が置かれる。
- 886年 最上郡は最上郡と村山郡に分割され、<sup>ぐんが</sup> 郡衙が置かれる。
- 10世紀 各郡に<sup>ごう</sup> 郷がおかれる。
- 902年 荘園整理令が下される。
- 934年 当地は芳賀郷となり、天童地域は出羽国最上郡芳賀郷と呼ばれた。
- 11世紀前半 出羽国に荘園（平安、室町の貴族寺社の私有地）が12、国衙領（平安以降国司の統治下にある土地）が13おかれていた。  
成生庄は藤原摂関家として成立していたと思われる。
- 1156年 里見家の始祖<sup>にったよしとし</sup> 新田義俊（里見太郎）、上野国<sup>たいひょう</sup> 碓氷郡里見郷に入部する。
- 1176年 「八条院領目録」に「出羽国大山成生荘」と記され、それ以前に「成生庄」が成立。
- 1192年 源頼朝、征夷大將軍となる。
- 1199年 源頼朝、没す。
- 1201年 僧尋暁覚台房、成生荘小畠村で経典を書写し金沢文庫に納める。
- 1263年 成生庄政所藤原真綱、若松寺に聖観音菩薩の懸仏を奉納する。
- 1266年 勸進聖が願主となり、善光寺式三尊像を寄進。「奉安置出羽国最上郡庄外郷」と記されている。

- 1278年 一向上人、成生庄に入り布教する。
- 1287年 一向上人入滅する。
- 1295年 二階堂の地に佛向寺が建立される。
- 1306年 「昭慶門院御領目録」に「成生荘」の記載が見える。
- 1311年 成生庄に佛向寺を開いた一向上人の27回忌法要が僧俗多数により行われる。  
高野坊遺跡より出土した墨書礫ぼくしよれきに「出羽国最上郡成生御荘政所藤原」と記される。
- 1333年 鎌倉幕府滅亡。建武の新政が始まる**
- 1335年 北条時行が鎌倉を落としたことで南北朝の争いが激化。各地で騒乱が続く。
- 1336年 里見蔵人義宗、成生庄に入る。**
- 1338年 足利尊氏、北朝より征夷大將軍を任ぜられ室町幕府を開く。**
- 1341年 北畠あきいえ頭家の弟頭あきのぶ信、奥州の南朝方の豪族を集め、北朝方の総大将石塔いしとう義房と栗原群三迫で戦いに挑む。
- 1351年 足利家内部分裂。武家政権の固まらないうち將軍足利尊氏と直義兄弟が戦う。
- 1356年 斯波家兼、没す。**  
**兼頼、8月6日に成生に入る。**  
**頼直、8月22日成生に入る（里見義宗の養子になる）。**
- 1357年 兼頼、現在の山形城に築城を始める。**
- 1372年 斯波（大崎）直持、没す。
- 1375年 頼直、成生の楯から天童山城に移城。天童氏を称する（天童頼直）。**
- 1379年 兼頼、没す。
- 1392年 南北朝が統一し、室町幕府が成立する。  
將軍足利義満、陸奥、出羽両国を関東公方足利氏満の支配下に置く。
- 1394年～ 頼直、三男満長を上山、四男頼高を東根、五男頼種を鷹巢（大石田）に分封する。
- 1410年 頼直、没す。法名 保國寺殿桃林源公大居士（天童市）  
仁照院殿從四位少將前大夫義山智證大居士（高野山）  
宝樹院殿證阿二空大居士（佛向寺）**
- 1467年 応仁の乱
- 1473年 願正坊は親鸞の弟子蓮如したがに随って、浄土真宗を広げるため奥州に下向する。
- 1475年 願正坊、出羽の布教を志し、関山峠を越えて出羽に入り布教活動を行う。
- 1520年 伊達植宗、上山城主義房を陥れ、高楯、天童に進出する。
- 1521年 天童頼長、成生十郎伊達郡に協力した山寺立石寺を攻め一山を焼き打ちする。
- 1568年 天童頼久誕生。
- 1582年 本能寺の変 織田信長自刃する。
- 1584年 天童頼久が最上義光に攻められ落城する。**
- 1588年 天童頼久、伊達家に仕える。